

お父さん

その日は、よく晴れた日曜日でした。いつもと変わりなく、朝から父と会話をしました。

「明日から、もうちょっと早く学校に行きたいけん、車で送ってね。」

「早くね。わかった。」

しばらくして、父がバタバタと音を立てて、家から出る姿を見ました。それが、私が見た父が歩いている最後の姿でした。

それから間もなく、父が車にはねられたことを知り、母が私を残して駆けつけました。

病院から帰ってきた母に、私が、「どうやった？」と聞いても、「まだ、よく分からん。」としか答えてくれず、さっきまで泣いていたような赤い目をして、椅子に座っていました。父がどういふ状況なのか詳しく知りませんでした。母を見て、ただごとではないと思った瞬間、たくさんの涙が溢れてきました。なんで、うちのお父さんなの？何も悪くないのに、なんで？死んだらどうしよう・・・と、いろんなことを考えて大泣きました。

父の事故から二、三日が経った頃、母からようやく父のことについて、聞くことができしました。道路を横断しようとした時、車にはねられ、地面にたたきつけられて腰から落ち、脊髄せきずいという神経の通り道を傷つけてしまったということでした。「命だけは取り留めることができました。」と聞いて、ほっとして涙が止まりませんでした。本当に嬉しくてたまりませんでした。しかし喜びも束の間、私は次の瞬間、信じられないような現実を突きつけられたのです。父は、できるだけ早く手術をしなければいけないこと、そして、もう自分の足では歩けなくなるといふこと……。私はショックで頭の中が、真っ白になってしまいました。そして暗い谷底に突き落とされたような気がしました。

その頃、ちょうど大阪から祖母が駆けつけていました。祖母から聞いた父の様子では、普段の父とはまるで別人のようでした。

「こんなに痛いんやったら、死んだ方がましや。」祖母が、「佳奈子を父親のおらん子にさせるんか。」と言うと、「・・・佳奈子の将来を楽しみにがんばるわ。」と、しばらく考えた末に

父はそう答えたそうです。その言葉通り、父は辛いリハビリも人一倍がんばり、車椅子の移動も一生懸命練習していました。私はそんな父の姿にとっても感動したことを覚えています。

父が車椅子の生活を始める前、私は車椅子の人や視覚障害者の人を見かけるとかわいそうと思ってしまったり、一人じゃできないことがたくさんあるだろうなと思っていました。しかし車椅子の父と毎日を過ごしていると、障害者の人はかわいそうという思いが自然になくなっていました。

障害者はかわいそうではなく、一人ではできないことがたくさんあるわけでもありません。現に私の父も、できないことよりもできることの方が多いからです。食事、お風呂、トイレなど、生活していて特に不自由なところはありません。足が動かなくても、手なら私たちと同じように動きます。障害者と健常者に壁はなく、同じ地球に住む、同じ命を持った人間です。だから、みなさんにも障害者はかわいそうという思いから抜け出してほしいのです。

あの事故から二年が経った今、父は職場復帰を果たしました。事故の後遺症である体の痛みと闘いながらも、毎朝仕事に向かい、いきいきとした姿を私たち家族に見せてくれています。

私は、父が「佳奈の将来を楽しみにがんばるわ。」と言ってくれたように、今の私が父にできることを考えました。それは、学校のためになるような仕事をする事です。

昨年私は、文化部の委員長に任命されました。文化部は、日頃の図書当番や掲示物の張り替えの他に行事ごとのパネル作りなど活動内容も多く大変ですが、部員や先生方にも支えられ、これまで委員長としてやり抜いてくることができました。私が全校生徒のため、父のためにがんばっていくことが、今の私にできることだと思います。

いつもは恥ずかしくて言いたい感謝の言葉も言えないままですが、父を一番必要としているのは、私です。歩けなくなっても、私の父です。

お父さん、ありがとう。